

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ

著者	根本 今朝男
雑誌名	ことばの研究
巻	2
ページ	63-74
発行年	1965-03-31
シリーズ	国立国語研究所論集 ; 2
URL	http://doi.org/10.15084/00001735

「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ

根本今朝男

はじめに

名詞に格助詞「が」のついた形（以下、これを「が格」の名詞とよぶ）と、形容詞（いわゆる、形容動詞をふくむ）がくみあわさったばあい（「地球が丸い」「海が静かだ」「水がほしい」など）、「が格」の名詞と形容詞との間にどんな関係があるかを調べたのがこの小論である。

（注1）①「空が青い」のような文と、「空は青い」のような文とをくらべたばあい、「空」と「青い」の事実上の関係は同じであり、ただ、それをのべるばあいの態度、つまり陳述的な側面だけが違っているものと考えられる。小論では、「Aはどんなだ」と「Aがどんなだ」における「は」と「が」の問題は一応考慮の外に置いた。しかしながら、形容詞述語文における「は」と「が」の使いわけは、本論で以下にのべるカテゴリーの違いと関係しているふしがある。たとえば、「地球は丸い」と「地球が丸い」では、「地球は丸い」のほうが普通であるのに、「水はほしい」と「水がほしい」では、「水がほしい」のほうが普通であるように思われる。「地球が丸い」は「地球」をとりたててのべていると考えられるが、「水がほしい」（普通の調子で発音したばあい）では、「水」を特にとりたててのべているとは考えにくい。しかし、この種の問題については、扱わない。

② また、「象は鼻が長い」「ぼくは水がほしい」「夏はビールがうまい」のような、「AはBがどんなだ」という形をした文の、「AはBが」における名詞Aと名詞Bとの関係にはいくつかの異なった型があるように見受けられるが、この小論では、「Bがどんなだ」だけを扱って他は扱わない。

③ 「名詞が+形容詞」という関係を保ちつつ、その全体がイディオムとなっ

64 「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ

て、あたかも単語のように用いられている例が多数見受けられる（目が高い・気が重い・手が早い、など）。イディオム化の程度はさまざまであろうが、それらはイディオムとして特別扱いをしなければならないので、これらは一括して考察の対象から除いた。

④ 形容詞「よい・わるい」とのくみあわせには慣用的なもの（人がよい・人がわるい、など）が多いので、当面の考察の対象から外した。また「ない」は、動詞「ある」との関係で見ていく必要があるので今回は省いた。「——のが～、——のほうが～、——ことが～」や、「あれ・これ・それ」などの代名詞とのくみあわせも当面の対象から省いた。

以上、(注1)にのべたような条件で調べた結果では、「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせはつぎのようなカテゴリーにわかれる。

I 性質・状態のもちぬしの結びつき

「花が白い」

<同義反復的な結びつき>

「色が白い」

II 主体的な結びつき

「私が痛い」

III 対象的な結びつき

(1) 感情・感覚の対象の結びつき

「水がほしい」

(2) 感覚を感じる箇所の結びつき

「手が痛い」

IV 「性質・状態のもちぬし」と「感情・感覚の対象」との中間的な結びつき

「騒ぎがうるさい」

V 状況的な結びつき

「朝が早い」

これらの各カテゴリーについて、その特徴や、カテゴリー間の関係などについて述べる。

I 性質・状態のもちぬしの結びつき

性質や状態を表わす形容詞（赤い・おとなしい・広い・若い、などなど）と、「が格」の名詞とがくみあわさると、「が格」の名詞は、形容詞の表わす性質や状態のもちぬしを表わす。このようなくみあわせを、「性質・状態のもちぬしの結びつき」とよぶことにする。つぎの用例について考えてみよう。

- 1) 今となって考えて見ると、不平に思ったのは私が未だ若かったからだ。〔平凡72〕
- 2) 下町に育っても両親が堅かったので男女の間のことはまるで知らなかった。〔女坂〕新潮 63)

この二例では、名詞はいずれも人間を表わし、形容詞は、その名詞によって表わされる、人間の属性を表わしている。「私が若かった」では、「私が」は、「若い」という状態のもちぬしを表わし、「両親が堅かった」では、「両親が」は「堅い」という性質のもちぬしを表わしている。

これを一般化して、「Aが若い」「Bが堅い」と言っても、関係は同じである。AやBは、やはり「若い」「堅い」によって表わされる属性のもちぬしである。この点、Ⅲであげる「水がほしい」とはっきり区別される。「水がほしい」のばあいは、「ほしい」という感情をもよおす主体は別に存在しているのであって、「水が」は「ほしい」という感情のもちぬしにはなれない。「水が」は「ほしい」という感情をもよおす対象以外にはなりえないのである（AやBが人間を表わす名詞のばあいは別）。

ところで、「Aが若い」「Bが堅い」についてもう少し考えてみると、AやBの名詞の範囲が限定を受けるのは、Aは、「若い」という形容詞で表わされる属性をもつものを表わす名詞に限られているということ、Bもまた、「堅い」という形容詞で表わされる属性をもつものを表わす名詞に限られているということ、この点においてである。「空気が若い」とか「勇気が若い」などとはおそらく言えないであろう。「気が若い」などの慣用的な表現のばあいまで含めたとしても、歳月の経過につれて変化していくものやことがらという限定がつくであろう。「堅い」のばあいも同様で、「堅さ」という属性をもつものやことがらという限定がある。

このことは、同時に、このくみあわせに登場する「が格」の名詞の資格を定めてもいる。形容詞によって表わされる属性をもつものを表わす名詞であるならば、具体名詞であろうと、抽象名詞であろうと、いっこうにさしつかえがない。「社長が堅い」とも言えるし、「意志が堅い」「約束が堅い」とも言えるわけである。

このくみあわせに属する用例にはつぎのようなものがある。

<名詞が具体的なものを表わすばあい>

- 3) でもあまりに水が汚いわね。『三四郎』135)
- 4) 生際の富士形になった額が狭く、……『あらくれ』71)
- 5) 「それもお前が下手だからだよ。」『あらくれ』197)
- 6) 切の長い目が細くて、……『あらくれ』71)
- 7) 円顔で浅黒くて体がしなやかで、眼が大きくて、……『冬の宿』116)
- 8) 二三日前に頭を刈ったと見えて、髪が甚だ短い。『三四郎』254)
- 9) 屋敷の大きい割に仏壇がみすばらしいと出入りの者は言う。『女坂』新潮 100)
- 10) 月見草ならもっと葉が広いわよ。『波』76)
- 11) お菜が少ない。『冬の宿』17)

<名詞が抽象的なことがらや現象を表わすばあい>

- 12) 「成程……非常に交際が広いですね。」『波』54)
- 13) 間代が其処より此処の方が三割方高かった。『平凡』113)
- 14) 「え、何しろ熱が高うございますからね。……」『波』207)
- 15) 何といっても、あの年ごろには、異性の影響力が一番大きいでしょうから……
『青い山脈』新潮 209)
- 16) 「……一般に婦人は了見が狭いでしょうな。」『青い山脈』新潮 303)
- 17) それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸方が大袈裟だ。『三四郎』217)
- 18) 帽子に手をやらなくてはならないほど風が強かった。『波』6)
- 19) 彼は妙に親孝行の気質が強かった。『暗夜行路』前140)
- 20) 樹には親しみが深く、……『女坂』新潮 126)
- 21) ……の秘密なつながり方が深いものに感じられて……『女坂』新潮 163)

(注2) 具体的なものを表わす名詞と抽象的なことがらを表わす名詞との中間に、「熱」「風」「火」……など、現象を表わす名詞があるが、ここでは、抽象的なことがらを表わす名詞の部に並列させてある。

この結びつきをつくる形容詞には、たとえば、つぎのようなものがある。

赤い・白い・暗い・明るい・高い・低い・浅い・深い・広い・狭い・細い・太い・長い・短い・堅い・柔らかい・強い・弱い・はやい・おそい・ゆっくりだ・いそがしい・せわしい・ひまだ・頑固だ・ずうずうしい・りっぱだ・派手だ・はなやかだ・みすばらしい・みにくい・きたない・きれいだ・きざだ・大げさだ・へただ・若い・おいぼれだ……

(注3) 「が格」の名詞と、性質や状態を表わす形容詞とがくみあわさってつくるくみあわせには、いくつかの段階があるように思われる。たとえば、

アベベが速い

マラソンが速い

スピードが速い。

という一連の表現について考えてみると、マラソンはアベベの動作という側面であり、スピードはマラソンという動作の速度という側面である。一連の表現とはいっても、もちろん、

アベベがマラソンがスピードが速い。

などという形は現実にはとらない。このばあいは、

アベベはマラソンのスピードが速い。

などのような表現をとるだろう。実際、ことがらの内容を文脈や場面の助けなしに、正確に表現するには、このような形をとる必要があると思われる。しかし、現実には、「アベベが速い」「マラソンが速い」「スピードが速い」という言い方が存在する。そこで、考えを進めるための便宜として、「アベベがマラソンがスピードが速い」という形にもどすと、「もの→その属性→そのまた属性→そのまた属性……」という系列で並んでいることがはっきりする。私のこの小論では「アベベが速い」も「マラソンが速い」も同一に扱った（「スピードが速い」についてはこのあとのべる）が、この二つは別のカテゴリーをなしているものかもしれない。あるいは、文論や陳述論的な観点をいれなければ処理しきれないのかもしれない。

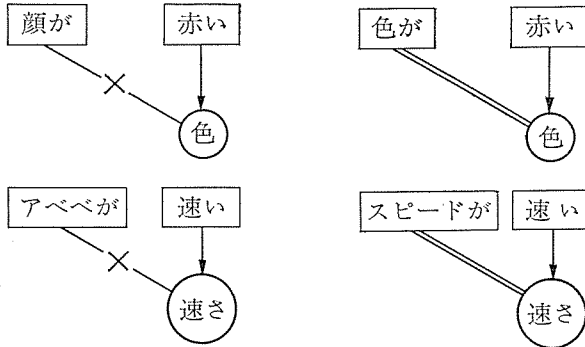
ところで、「スピードが速い」という式のくみあわせの性格について考えてみる。このくみあわせの用例にはつぎのようなものがある。

九州の男で色が黒いから……（『三四郎』97）

悦子は色が白く中高の美しい顔立ちだった。（『女坂』新潮 7）

「速さがはやい」「重さがおもい」「明るさがあかるい」なども同じ仲間である。

このくみあわせでは、「が格」の名詞が、形容詞によって表わされる性質・状態のもちぬしを表わすとは言いにくい。「黒い」とか、「白い」とか言えば、それ自体が色を表わしているのであって、色の属性を表わしているわけではない（色の属性としては、「こい・うすい・あざやかだ・どぎつい」などがある）。「顔が赤い」といえ、顔の色について言っているのだということは説明ぬきでわかる。「色が黒い」式のくみあわせは、いわば、同義反復の結びつきであって、属性とそのもちぬしという関係では説明がつかない。このことは、つぎのようにすればもっとはっきりするかもしれない。



左側の例では、形容詞の表わす内容の類概念を求めても、「が格」の名詞と一致することはない。ところが、右側の例では、それが一致する。「背が高い」「年が若い」「高さが高い」「若さが若い」などとはいわない）なども、同義反復的な性格が濃い。

このようなわけで、「色が白い」「速さがはやい」式のくみあわせと、もちぬしの結びつきとは別のものではないかと推測している。

II 主体的な結びつき

形容詞が、その語意的意味の性格として、感情や感覚を表わし（うれしい・恋しい・ほしい・かゆい・くすぐったい、など）、「が格」の名詞が人間（または、人間に見たてたもの）を表わすばあいのくみあわせには、「が格」の名詞が、「形容詞が表わす感情をもよおしたり、感覚を感じたりする主体を表わす」ばあいと、「形容詞が表わす感情をさし向けたり、感覚を感じたりする対象を表わす」ばあいとがある（注5参照）。このうち、前者のくみあわせを、ここでは、「主体的な結びつき」と名づける。

この結びつきは、形容詞が感情・感覚を表わす形容詞であるということ、および、名詞が人間（または、人間に見たてたもの）を表わすものに限定されているという点において「性質・状態のもちぬしの結びつき」と区別される。また、名詞が対象を表わさないという点で、「対象的な結びつき」とも区別される。

このくみあわせに属する用例にはつぎのようなものがある。

22) 女中さん達に笑われると僕が恥ずかしいから……」（『女坂』新潮 146）

23) 僕が妹を好きなのを内々察してわざとそんなことを言ったのかと思うと 腹が立ったよ。（『女情』26）

24) その代り木村が少しつらいだけ。(『或る女』前39)

以上の3例は、いずれも、「が格」の名詞が人間を表わすばあいの用例であるが、「が格」の名詞がものを人間に見たてたもの（あるいは、無情のものを有情のものに見たてたと言うことのほうがより適切であるかも知れない）を表わしている用例に、つぎのようなものがある。

25) 「人形が寂しい事よ。」(『波』137)

主体的な結びつきをつくる「が格」の名詞としては、「犬がさみしいだろう」のように、人間以外の動物を表わす名詞もまた来ることができる。

このくみあわせでは、形容詞は直接的断定以外の形（～のは、～事は、～のだ、～らしい、～だろう、など）をとることが多い（ことに、「が格」の名詞が1人称以外のものであるばあいには）。

したがって、主体的な結びつきを問題にするばあい、これらとの関係を考えて扱う必要があるように思われる。

主体的な結びつきをつくる形容詞には、たとえばつぎのような語がある。

うれしい・さみしい・恋しい・好きだ・ほしい・かゆい・くすぐったい・痛い・苦しい・はがゆい・満足だ・愉快だ……

III 対象的な結びつき

(1) 感情・感覚の対象の結びつき

感情や感覚を表わす形容詞（欲しい・好きだ・恋しい・痛い・かゆい……）と「が格」の名詞とがくみあわさって、名詞が、形容詞によって表わされる感情や感覚をひきおこす対象や、感情が向けられる対象を表わすばあい、これを「感情・感覚の対象の結びつき」と名づける。この結びつきのばあい、対象は具体的なものでも、抽象的なことがらでもよい。感情の対象から先にのべると、用例にはつぎのようなものがある。

＜対象が具体的なものであるばあい＞

26) 「何だい、もっと水が欲しいのかね？」(『青い山脈』新潮 72)

27) 「まあ、いいお父さまで、お姉さまがうらやましいわ。」(『山の音』34)

28) 静岡で東京の新聞を買ったが、出てからまるで見ない東京新聞が変に懐しかった。(『暗夜行路』前215)

29) ほかは面白いが、勘ちゃんが厭だ。(『平凡』17)

＜対象が抽象的なことがらのばあい＞

70 「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ

- 30) 俺には力がほしい。(『その妹』125)
31) 自分の愚しさが腹立しかった。(『あらくれ』78)
32) 自分で炊事をするのは時間が酷く惜しくも成ったり、……(『土』下 56)
33) また、二人の他人のような無関心が、なにかうらやましくもあった。(『山の音』304)

感情の対象の結びつきをつくる形容詞は、主体的な結びつきをつくる形容詞と共通する。語例としては

「にくらしい・いらだたしい・はがゆい・憤らしい・ばかばかしい・めんどろくさい・胸くるしい・満足だ・苦痛だ……」

などがある。

つぎに、感覚の対象についてのべる。感覚形容詞と「が格」の名詞とがくみあわさって、対象的な結びつきをつくるのは、つぎのようなばあいである。

34) 「痛い、何処。何処が痛いんだ。脚が痛んで来たのか。」

「うゝん、お父さんのお髻が痛かったんだよ。」(『波』337)

感覚形容詞の使われた例として、実際に採取できたのはこの一例だけであった。しかし、考えてみれば、「ごつごつした木の腰掛が痛かった」とか、「カラタチのとげが痛かった」などの用例もあり得るはずである。この結びつきをつくる形容詞の語例としては、「くすぐったい」(「お父さんのお髻がくすぐったい」と言うことができるだろうから)などは有力候補であろう。しかし、すべての感覚形容詞において可能かどうかは、いささか疑問のような気がする。

(注4) 対象的な結びつきをつくる「が格」の名詞には、「を格」に置きかえてもさほど不自然でないものと、そうでないものがある。これは、主として形容詞の性格によるものと思われる。たとえば、「水がほしい」→「水をほしい」,「咲子が好きだ」→「咲子を好きだ」などは置きかえの可能性が大きい。が、「なくした本が惜しい」「髻が痛かった」などは、その可能性がほとんどない。

(注5) 「僕が好きだ」のように、「が格」の名詞が人を表わすばあい、「が格」の名詞と形容詞との関係だけでは、「僕が(彼女を)好いている」の意味なのか、「(彼女が)僕を好いている」の意味なのかははっきりしない。しかし、実際に使われるときには、文脈によって、対象か主体かのいずれか一方に決定づけられる。

(2) 感覚を感じる箇所の結びつき

覚感を表わす形容詞と、身体（おもに人間について）の部分を表わす「が格」の名詞とがくみあわさると、名詞は感覚を感じる主体の箇所を表わす。

35) 『ア、手が痛い。』 (藤村「春」新潮 268)

36) 「胃が痛い、胃が痛い。」 (『雪国』91)

(1)であげた対象（「お父さんのお髷が痛かった」）は、主体の外部にあるものであったが、感覚を感じる箇所は、対象として主体の内部にある。

また、感覚を感じる箇所を次第に拡張していくと、「手が痛い」→「頭が痛い」→「上半身が痛い」→「からだ全体が痛い」→「私が痛い」となって、最後には主体的な結びつきに移行する。少なくとも一見そのように見える。しかしながら、「手が痛い」ばあいでも「私は手が痛い」と言えるし、「上半身が痛い」ばあいでも「私は上半身が痛い」と言うことができる。ところが、「手はカラタチが痛い」とはいえない。一般に対象的な結びつきにおいては、「主体ハ+対象ガ+感情・感覚形容詞」の形をとる。このばあい、「手」と「私」が同じ仲間なのではなくて、「手」と「カラタチ」とが同じ仲間なのであると考えられる。したがって、「感覚を感じる箇所の結びつき」は、主体の結びつきの仲間ではなく、対象的な結びつきの仲間にはいるものと考えられる。

にもかかわらず、この結びつきでは、対象が主体の外にあるのではなく、主体の内部にある。ここに、「感覚を感じる箇所の結びつき」が、一つのカテゴリーとしてなりたつ理由がある。

この結びつきをつくる形容詞には、たとえば、「痛い・かゆい・くすぐったい・だるい・はれぼったい・むずがゆい……」がある。

(注6) 以上のくみあわせのほかに、

「老祖母さん、霜焼が痛い」 (藤村「春」新潮 114)

というくみあわせがある。「水虫がかゆい」などもこの仲間であるが、「霜焼」や「水虫」は、身体の部分にはあっても、部分そのものではない。

これらは、症状という現象を表わしているのである。このように、感覚の対象を表わす「が格」の名詞には、具体名詞だけでなく、現象を表わす名詞が来るばあいもあり得る。

IV 「性質・状態のもちぬし」と「感情・感覚の対象」

との中間的な結びつき

性質・状態のもちぬしの結びつきと、感情・感覚の対象の結びつきとの中間に、

「が格」の名詞が、もちぬしの性格と対象の性格とを兼備しているくみあわせがある。これらは、具体的文脈の中では、両者のいずれかに比重が置かれた形で現われることが多い。

37) 彼が教場へ入って来る其様子がいかにも可笑しいというので、早速生徒は彼に『蟹の横這』という綽名を付けた。(藤村「春」新潮 206)

この用例は「様子」自身が、おかしい(へんだ)という性質をもっていて、それを感情をもよおす主体が受けとめたときに、「様子」をおかしいと感じたという事実関係を表わしていると考えられる。この種の結びつきをつくり得る形容詞は、一方では客観的な性質や状態を表わすことができ、また一方では、感情や感覚(この用例では感情)も表わすことができるという両面の性格をもっているわけである。また、論理的に考えても、性質や状態のもちぬしが、感情や感覚の対象となることはおかしくない。こういうことが、中間的な結びつきの存在が可能となる理由であろう。

具体的用例について見ていこう。

38) 「そうだろう。此方とらと身分が違うもの。本人が結婚しようと思っても、傍がうるさかろうよ。……」(『縮図』204)

この例では、「もちぬし」に比重がおかれているのか、「対象」に比重が置かれているのか、容易に判断ができない。だが、つぎの例では、「対象」を表わしているということが比較的容易に文脈から判断できる。

39) 寧ろ昇之助が何とかしたという方の話が面白かった。(『三四郎』39)

しかしながら、このばあいでも、「が格」の名詞と形容詞だけでは、性質・状態のもちぬしなのか、感情の対象であるのか区別がつかない。「話がおもしろい」「小説がおもしろい」などと言うばあいには、たまたま「おもしろい」と感じたときにも言えるし、「話」や「小説」が特定の主体にかかわりなく、客観的におもしろい内容をもっているというばあいにも言える。

中間的な結びつきを実現する形容詞は、その語的性格からある種のものに限定されるということはさきにのべた。形容詞のこの種の性格に関しては、時枝誠記氏がすでに、その著『国語学原論』(P.373~379)で、形容詞には、客観的な属性のみを表現するもの(赤い・深い、など)と、主観的な情意のみを表現するもの(ほしい・恋しい、など)があって、前者では属性の所有者が主語となり、後者では情意の主体が主語となるが、これらの中に「面白い・にくらしい・おかしい・淋しい・恐ろしい・暑い・寒い、など」の一群の語が存在するということを指摘しておられる。時枝氏の言われる「中間にある一群の語」というのと、ここ

での中間的な結びつきを実現する形容詞とは、ほぼ一致するのではないと思われる。

なお、主体的な結びつきと対象的な結びつきとの間には中間的な結びつきが存在しない。それは、主体であると同時に対象であるということが成立し得ないからであろう。

V 状況的な結びつき

これまでに、もちぬしの結びつき、主体的な結びつき、対象的な結びつき、および性質・状態のもちぬしと感情・感覚の対象との中間的な結びつきについてのべた。しかし、これらのほかに、「が格」の名詞がもちぬしでも、主体でも、対象でもないというくみあわせがある。「僕は三時がねむい」「野菜は東京がやすい」などがそれである。

このくみあわせでは、「が格」の名詞は、「僕はねむい」「野菜はやすい」という主・述表現によって表わされることがらの時間的・空間的状况を示しているのである。この種のくみあわせを、ここでは仮りに、「状況的な結びつき」と名づけておく。状況的な結びつきの用例としてはつぎのようなものがある。

40) あんまり夜深しをするとまた翌日の朝がづらい。(『浮雲』42)

41) この部屋では、一日じゅうでその時刻が一番明るく、……(『多情仏心』後70)

42) 「明日が早いから俺は階下で早くねるといい」(『女坂』新潮 34)

採取した用例には、時間的なものしかなかったが、場所的なものもあり得るはずである。

用例出典一覧

阿部 知二	「冬の宿」	岩波文庫
有島 武郎	「或る女」(前篇)	岩波文庫
石坂 洋次郎	「青い山脈」	新潮文庫
円地 文子	「女坂」	新潮文庫
川端 康成	「山の音」	岩波文庫
川端 康成	「雪国」	岩波文庫
里見 弴	「多情仏心」(後篇)	岩波文庫
志賀 直哉	「暗夜行路」(前篇)	岩波文庫
島崎 藤村	「春」	新潮文庫

74 「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ

徳田 秋 声	「あらくれ」	岩波文庫
徳田 秋 声	「縮図」	岩波文庫
長 塚 節	「土」(下)	岩波文庫
夏 目 漱 石	「三四郎」	岩波文庫
二葉亭 四迷	「浮雲」	岩波文庫
二葉亭 四迷	「平凡」	岩波文庫
武者小路実篤	「友情」	岩波文庫
武者小路実篤	「その妹」	岩波文庫
山 本 有 三	「波」	岩波文庫